

月刊

インド



Monthly Journal of the Japan-India Association

財団法人 日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 106 年)



〈 新築なった在京インド大使館 〉

目次

1. インド留学体験記 寄稿	P. 3
2. 開発援助の先駆的 NGO オイスカ	P. 6
3. インドニュース	P. 8
4. イベント情報	P. 12
5. 新刊書紹介	P. 13
6. 掲示板	P. 15

1. インド留学体験記 鏑木義博氏より寄稿

昨年インド留学を終えて帰国された協会会員の鏑木氏より、留学体験記を寄稿頂きました。6年間に亘る留学生生活で見聞されたことや、課題として取り組まれたことを著されています。

◇天竺今昔 - 55歳からのインド留学より◇

昨年末に6年間のインド留学から帰国しました。

1997年から2年間のデリー駐在勤務がきっかけとなり、2002年定年退職後、西北チャンディガールのパンジャブ大学文学部古代インド歴史・文化・考古学科マスター・コースに入学、更にPh.D.リサーチに進み「古代インドの日本文化への影響 — 比較文明論」と題する論文をまとめることができました。

留学中ずっと日印交換留学生などインド政府奨学生に遇せられる光栄に浴し、両国の関係各位から賜ったご厚情に心から感謝申し上げます。他に日本人が一人(同じ大学生)しか居ない地方都市で一般学生寮に起居した体験は稀のようですので、広大多様なインドの実態に少しでも迫るべく、その着眼点を下記して皆様のご参考に供します。



〈パンジャブ大学 ガーンディー記念館〉

① 「歴史的世界」としてのインド

インドは複雑多岐で分かりにくいと言われる原因の一端は、そもそもインドを現在の国家概念から日本と同列に比較し括ってしまうとする出発点にありそうです。例えば日本と欧州とは同列に比較できないように、インドは東アジアに対応する南アジアであり、更には東洋と西洋の間の「中洋」です。また、インド亜大陸は、大きく四つの人文地理的特性を含んでいます。即ち、「麦のインド」のインダス流域は乾燥アジアに、「米のインド」のガンジス流域は湿潤アジアに、東西両海岸部は海洋アジアに連なる一方、「棉のインド」のデカン高原が半島を南北に画す形となります。

② 地域に根ざす「循環するインド史」

インド史は通念的に統一と分裂、都市化と農村化が繰り返され、日本史のように段階的に発展する方向が見えにくい、むしろ王朝の興亡に終始すると言われます。確かに、大帝国内建設と遊牧民族の侵入と地方割拠が繰り返されているようです。但、地域的に見ると、西北から新しい潮流が東と南へ波及すると共に、時代を下るにつれ北・中部・南の地域間の拮抗が目立ってきます。やはり、「先ず地域ありき」の視点からインド(世界)の歴史を見るのが肝要です。地域実態が見えてこない概念化の弊に陥ることなく、個々の地域特性を見極めるところから始めることにより「インドは同心円的かつ重層的に過去と現在が並存するモザイク社会」と総括される実体が見えてくるのではないのでしょうか。

③ 実態理解を難しくする概念的英語

イギリス人はインドを植民地化する過程でより包括的なインド理解のために様々な分野で英単語による概念化を図ってきました。一般の日本人にとってはそれら英語概念を翻訳により理解せねばならないことに加えて、植民地統治のためのイギリスの恣意的解釈が更に実態理解を妨げているように思われます。例えばHinduism(ヒンドゥー教)は、古代バラモン教から出発し

ヴィシュヌ、シヴァ信仰など様々な宗派を包含した「インド固有の宗教」の総称であります。次にCaste(カースト)は、ポルトガル語の人種などを語源として「インドの社会階級」の総称として使用されていますが、インド社会には古代よりヴァルナ・ジャーティ・ゴートラ・サピндаなど様々な宗教・職業・地縁・血縁から成る集団概念が存在している中で全て社会階級制度の範疇に一括りにしてしまった訳です。一方、Āryan(アーリヤ人)は語源的には「高貴なもの」であり、近代比較言語学においてインド・イラン・欧州にまたがる共通の祖語を有する集団(印欧語族)を定義するところが、白人優位の人種論にすり替わりイギリス植民地統治の理論的裏付け、更にはナチスによるゲルマン民族優越論に利用されたことは衆知の通りです。これに関連して、従来インド古代史の定説であったアーリヤ民族の西北インド侵入、インダス文明の破壊と滅亡、ガンジス流域への展開なども考古学的な裏付けに欠け、インダス文明とヒンドゥー文明との継続性、民族的な一貫性が最近の地元学会では有力になりつつあります。

④ 確固たるインド人の死生観

翻って現代では、精神分野程インド人と日本人の感覚の違いが見出される側面はないでしょう。即ち、日本社会では戦後の急速な工業化と消費志向にあって物質万能のこの世が全てであって、精神世界なかんづく宗教については胡散臭いものとして一般に避けられる傾向にあります。他方、インド社会では都市部で物質的満足に走る嫌いがあるにせよ、総じて信仰を基盤とした世界観・倫理観・社会慣習は未だ健在です。特定の神に帰依する見返りに現世利益への期待が見え隠れするのも確かですが、人々の心象は物質的繁栄の前に精神的安寧が第一義にあるように思われます。その根底には「この世」と「あの世」は一気通貫に「輪廻転生」して「業」が巡るという死生観があるのではないのでしょうか。それにつけ私に思い出されるのは、ヒマラヤ山麓から夜行バスでの帰路、深夜の峠越えで運転手がうたた寝でもしていたのかトロトロ走っているのを乗客のおじさんがヒンディー語か何かで運転手に向かって吼え始めました。「ちゃんと速く走れ」位叫んでいるのか、ハンドルを握ったままの運転手と口喧嘩となり、他の乗客も加わって掴み合いになりそうな大騒ぎ。その内、峠に着いて休憩と食事を摂って再発進、夜目に見ると先刻のおじさんが助手席に座って運転手と親しく談笑しているのです。日本なら凄じい剣幕で口喧嘩しようものならそれっきりが常でしょうが、インドの人は是々非々を心得ているのか何事も丸く納まる。街中では、いつもの停電でロータリーの信号が消えてしまえば割り込み車でもちもさっちも動きがとれなくなるが、いつものまにかポリスに替わってどこからともなく親切な御仁が現れて交通整理をしてくれるのも似たような現象です。どうもインド人は目の前(「現世」)の事象を超えて過去から未来(「来世」)までお見通しで行動している節があります。インド社会の象徴たるカーストも不可触民への差別が消えない階級社会と簡単に断じる訳にはいかない。時空間を超越した中で同朋としての一体感が存在するようで、とどのつまりインドは成長・変化より維持・安定を指向する社会だと考えたくになります。

⑤ 文化を共有するインドと日本

以上のように「多様な」インドと「単一な」日本を比較することは、どだいレベルの違うもの同士を俎上に乗せることで無茶であると自問しつつ、私はPh. D. 論文で日印文明比較を試みました。周知の通り、南北に延びる日本列島は縄文・弥生以来外来文化・大陸文明を摂取しつつ独自の文化を形成していった歴史を持ちます。インドが「多様の中の統一」と言われる一方、日本は一見モノ・カルチャーのようで実は「統一の中の多様」とも言える文化の豊かさを有しております。イ

インドと日本は、大陸では遠く隔てられていますが、海域ではモンスーン・アジア、海洋アジアの一環としてつながっています。また、雲南を源流とする照葉樹林文化帯においては東ヒマラヤと西日本とで東西の両端に位置付けられます。また、ユーラシア史の視点からは匈奴(フーナ)など北方遊牧民族の動きに直接・間接に影響され歴史的な画期が同軌していることもあります。勿論、仏教の伝播が最大のインドからの思想的・文化的インパクトではありますが、密教の中のバラモン教的要素も濃厚で、更には非仏教的要素の直接伝播も散見されます。シルク・ロードなど様々な海陸のルートによる伝播の過程でアジア各地の文化と習合・変容した要素が、縄文以来の土着文化と同化し日本文明の血肉となっている—この千年スパンのユーラシア諸民族による相互交流と綿々たる文化的リレーの営みに引き換え、昨今の IT に象徴されるグローバリゼーションの波は何と一方的で皮相なものでありましょう。古代文明の伝播・受容・融合・変容・同化の過程にこそ、世界人類の共存と普遍の価値観の共有を希求する現代人に示唆するところ大なるものがあると信じます。



〈パンジャープ地方の焼きイモ屋さん〉
ライムの汁をかけて食べる

では、自然と文化を軸に日印交流の輪の更なる拡大に努めてまいり所存です！

〈鏑木 義博 氏 略歴〉

- 1947年 東京生まれ
- 1969年 松下電器貿易(株)入社
- 1997年 インド松下電器(株)出向(～99年)
- 2002年 松下電器産業(株)定年退職
パンジャープ大学文学部古代インド歴史・文化・考古学科 マスター課程入学
(日印文化交流奨学生)
- 2004年 同課程修了
- 2004年 同大学 Ph. D. リサーチ課程進学(インド政府一般文化奨学生)
- 2008年 同 Ph. D. 論文提出
- 現 在 奈良県生駒市在住

2. 開発援助の先駆的 NGO オイスカ ~インドからの報告~

財団法人オイスカ国際協力部職員 齊藤ゆい氏からの寄稿です。

オイスカは(現在ワルリの村での活動はしていませんが)、日本本来の力や魅力、またそれぞれの国や地域の力や魅力を引き出し、高めることに重点を置いて活動しています。その意味でワルリの人々の「自然との共生の文化」生き方や取り組みは、現代人に参考になる面が多い、との思いが籠った記事です。

◇Another World is Possible ~ インド・ワルリの人々の村から◇

ムンバイから北へ約 150 キロ。車で 5~6 時間ほど走ったところに、その村はある。マハラシュトラ州ターネー県タラサリ。少数先住民族(インドでは指定部族: Scheduled Tribe と呼ぶ) ワルリの人々の住む村である。この一帯は古くから指定部族の多い地域であり、特にターネー県においては県人口の 10 人に 1 人がワルリ人であるといわれている。

私がワルリの人々に初めて出会ったのは今から約 8 年前、学生 NGO のスタディツアーでワルリの人々の住む村を訪問したのがきっかけだった。人のつながりを大切にし、自然と調和しながら生きるワルリの人々の生活は、忙しい都市に暮らす者の目には豊かで幸せなものに映ったが、その裏側には少数先住民族特有の歴史があった。



〈ワルリ村の様子〉
雨季には緑が溢れ
女性達がお喋りしながら手早く田植えをしていく

紀元前にアリア人がインド大陸に渡る前からインド大陸で生活していたと言われる、ワルリの人々。しかし他民族の侵入により森の中に追いやられ、さらに 20 世紀になると外部からやってきた商人などに土地を騙し取られて、小作人として貧しい生活を強いられるようになった。インド政府の政策により指定部族優遇措置がとられている現在でも、教育や仕事の機会は限られており、貧しさから抜け出せない人が多いという。

近年インドイコールで語られているような IT や経済成長とは、無縁の村である。雨季には村のまわりに青々とした田んぼが広がり、どこまでも続く緑の丘に、赤茶色の土壁の家々が点在している。農作業が始まる頃に雨乞いのお祭りをし、収穫が終わったら神々に感謝を捧げる。自然界のサイクルに寄り添った、シンプルな暮らし。一見単純で、原始的にすら思える彼らの暮らしは、しかし実際は非常に繊細な自然観察と、その中で生き抜く知恵、そして豊かな経験に満ちている。たしかに彼らはお金持ちではない。しかし村で出会うワルリの人々の顔はみなやさしくて、幸せそうだ。余分なものはない、けれど「必要なものは全部ここにあるのよ」と、村の女性は笑って言った。

そんな村の魅力もさることながら、私がこのワルリの人々を訪ね続けているのには、もう一つわけがある。それが、彼らが伝統的に描き伝えてきた「ワルリ絵画」。ワルリ絵画はもともと、家の土壁に米の粉を溶いたものを使って描かれていた。かつて文字をもたなかったワルリの人々は、新婚夫婦の家の壁に絵を描くことで結婚の証明としていた。現在では、布などの上に生活の様子や儀式、神話や昔話なども多く描かれるようになったが、どの絵も 1 枚の中にワルリの世界観がいきいきと

表現されている。

写真の絵は、『太陽神と村の1日』を描いた1枚。朝、山の間から太陽神が顔を見せると、村の1番高い木のとっぺんにいる鳥が歌い始め(左上)、その声を聞いた他の鳥たちも一斉に歓声をあげる。すると村人の家にいる鶏たちが鳴き、その声を聞いた人間は太陽神をお迎えするために身支度を整えて(左中央)1日が始まる。日中は家事をしたり(左下)、狩り(上中央)や農耕(中央)、土木作業(下中央)などに出かける。



〈ワルリ絵画＝太陽神と村の1日〉

人々が疲れはじめる昼下がり、太陽神が一層強く照りつけ始めたら、それは午後の休息時間のしるし。人々の疲れが癒された頃、太陽神はその力を弱め、人々は田畑へ戻って仕事を再開する。夕方になり、1日中世界を見守った太陽神が神の世界へと帰って行くと(右中央)、人々も家路につく。

昔から自然の中で生きてきたワルリの人々の生活は、自然のサイクルの1部として、動物や植物とともにある。人間も自然の1部として生かされている、という謙虚さと感謝の念。彼らの生活を見ていると、日本でも古来、八百万の神々を大切にし、自然に感謝し調和しながら生きてきたことを思い出す。そして今の私たちは、「文明」と呼ばれるものの恩恵を受けすぎて、本当の「豊かさ」とは何かを見失いかけていることに気づかされる。

長年の差別の中で、自分たちの文化にすっかり自信を失っていたワルリの人々だが、近年インド国内外の人々からワルリ絵画の魅力が注目されるようになるにつれて、自身の文化への誇りと自信を取り戻しつつある。最近では、積極的にワルリ絵画を描く若者も増えてきた。1人ひとりが、自分のルーツや文化を大切にし、それを育んできた環境を守っていくこと。それは、「ふるさとづくり」をテーマに50年近く国際協力を行ってきたオイスカの理念と同じだ。

“Another world is possible.”これは、毎年1月末に行われる「世界社会フォーラム(World Social Forum: WSF)」のスローガンである。WSFは、世界の経済をリードする企業家や政治家が集まって毎年スイスのダボスで行われる「世界経済フォーラム」に対抗して始まった国際会議で、グローバリゼーションがもたらす影響と問題について、市民の立場から考えることを目的としている。2009年1月、ブラジルのベレンで開かれたWSFの会場に、4人のワルリ人がいた。インドの少数民族代表として、世界に語りかける力を持ち始めたワルリの人々。今、インドから、日本から、そして世界のあちこちから、“Another World＝よりよい世界”を実現するための一歩が、踏み出されている。

〈斉藤 ゆい 氏 略歴〉

大学在学中より、インド・フィリピンの子どもたちの教育支援を行う学生NGO「めぐこーアジアの子どもたちの自立を支える会」に所属。同NGOのスタディツアーに参加した際、ワルリの人々に出会い、彼らの活動を通して参加型社会開発に興味を持つようになる。

大学院卒業後、現職。

ワルリ絵画の展覧会などを通じて日本国内にワルリを紹介しているNPO・KANSARI(カンサリ)のメンバーとしても活動中。(KANSARIにつきましては、<http://warli.jp/> をご参照下さい)

3. インドニュース (4月1日~4月30日)

I. 内政

4月6日

- アッサム州の州都グワハティ市及びデーキアジュリ市で爆弾テロが発生。少なくとも6人が死亡、30人以上が負傷。グワハティ市では2008年10月にも爆弾テロが発生しており、その際には84人が犠牲となった。犯行声明は出されていないが、7日がアッサム統一解放戦線(ULFA)(注:アッサム州の分離独立を目指す過激派)の活動開始30周年記念日であったことから、ULFAの犯行との見方もある。

4月16日

- インドの27州および7連邦直轄領のうち、15州及び2連邦直轄領の計124か所で下院総選挙の第1回投票が実施された。この際、ジャールカンド州、オリッサ州等で極左過激派と見られる勢力が投票所を襲撃し、約20名が死亡。

メモ:

インドのテロ事件には、大きく分けて、①イスラム系過激派(カシミール過激派やインド国内のイスラム系過激派)、②北東部の分離独立を目指す過激派(ULFAなど)、③極左過激派(地域によって「マオイスト」、「ナクサライト」と称される)という3種類の組織のいずれかが関与している。

これらのうち、昨年のムンバイ連続テロ事件をはじめ、近年インドの主要都市で発生しているテロ事件には①のイスラム系過激派が関与している場合が多い。①のイスラム系過激派によるテロはニューデリーやバンガロールでも発生しており、日本人が巻き込まれる可能性もあるので最も注意が必要。②の北東部諸州過激派の活動地域はアッサム州やナガランド州、マニプール州などであり、③の極左過激派の主な活動地域はジャールカンド州やオリッサ州などとなっている。

4月20日

- 昨年11月のムンバイ連続テロ事件で唯一逮捕されたパキスタン人カサブ容疑者の初公判がムンバイ市内で行われた。報道によると、検察官が読み上げた供述内容(ムンバイ連続テロ事件がラシュカレ・トイバによって実施されたことを示すもの)に対し、カサブ容疑者は「警察に強要された内容である」として供述内容を撤回した。
- インド宇宙研究機構(ISRO)は、地表観測衛星の打ち上げに成功したと発表。同衛星はイスラエル企業との協力により開発され、インド国産の4段式固体燃料ロケットで打ち上げられた。インド国内には、この衛星は全天候型の偵察衛星であるとの見方もある模様。なお、インドは昨年10月に月周回衛星「チャンドラヤーン1号」の打ち上げに成功している。

4月23日

- 下院総選挙の第2回投票が13州の計131か所で実施された。これに先立ち、22日には、ジャールカンド州で列車が極左過激派と見られる一団に占拠され、約700人が一時人質になったほか、第1回投票に続き各地で選挙妨害活動が行われた。

Ⅱ. 経済

4月2日

- ビジネス・スタンダード紙は、2009年2月のインドの輸出が前月比21.7%減少し、過去20年間で最低になったと報じた。

4月6日

- インドの株価指数 SENSEX の終値が 10,534.87 ポイントとなり、年初来の高値を更新した。SENSEX は 2008 年 1 月に史上最高値となる 21,206.77 ポイントを記録した後下落を続け、同年 10 月には 8,000 ポイントを下回っていた。この後も SENSEX は微増を続け、15 日には 6 か月ぶりの高値となる 11,284 ポイントとなった。

4月8日

- インド自動車製造者協会(SIAM)は、2008年度(2008年4月～2009年3月)の乗用車販売数が前年度比0.13%増にとどまったと発表。2007年度の販売数は12.17%増を記録していた。また、SIAMは、2009年3月期の国内新車販売数が前年同月比マイナス1.15%であったことも発表。国内新車販売数は、1月期のマイナス6.88%から2月期には15.02%増を記録していたが、再びマイナスに転じた。

4月16日

- ビジネス・ライン紙は、インドにおける直接税の税収基盤(所得税の納税者数)が過去10年間で約1,730万人から約3,370万人に倍増したと報じた。

4月21日

- インド準備銀行(中央銀行)は、2009年度の経済成長率が6%程度になると発表。また、同日、インド準備銀行は、政策金利(レポ・レート)を5.0%から4.75%に引き下げた。レポ・レートは、3月4日に5.5%から5.0%に引き下げられたばかり。

Ⅲ. 外交

4月1日

- パティール大統領がインド北東部のアルナチャル・プラデシュ(AP)州を訪問。AP州は、インドが実行支配しているが、中国が領有権を主張しており、2003年以降、インド・中国間で国境確定のための政府間交渉が行われている。なお、AP州で計画されているアジア開発銀行(ADB)の融資プロジェクトに対して中国が異議を唱えていることに関連し、ムカジー外相は、「AP州はインドの不可分の領土である」と述べた。

メモ：

インドは、パキスタン及び中国との間で国境問題を抱えている。パキスタンとの間では、カシミール問題のほか、海上の国境確定問題(シール・クリーク問題)がある。パキスタンとの国境問題については、2004年から開始された複合的対話プロセスの中で協議が行われている(なお、複合的対話プロセスは、昨年11月のムンバイ・テロ事件以降停滞している)。中国との間では、アルナチャル・プラデシュ州の問題のほか、アクサイ・チン地区(カシミールの北東部：中国が実行支配し、インドが領有権を主張)の問題がある。いずれの国境問題についても、これまでのところ解決の見通しは立っていない。

4月2日

- シン首相がロンドン・サミット(第2回金融・世界経済に関する首脳会合)に出席。また、この機会に、オバマ米国大統領と初めての首脳会談を行ったほか、ゴードン英国首相と会談した。

4月6日

- アンサリ副大統領がクウェートを訪問。インド・クウェート間における首脳クラスの往来は、2006年6月のサバーハ・クウェート首長(クウェートの元首)の訪印以来。

4月8日

- ホルブルック米国特別代表(アフガニスタン、パキスタン担当)が訪印し、ナラヤナン国家安全保障顧問ほかと会談。同特別代表の訪印は、2月に続いて2回目。

4月20日

- パティール大統領がスペインを訪問。インド大統領のスペイン訪問は初めて。また、この後パティール大統領は、ポーランドを訪問。

4月22日

- スリランカで政府軍がタミル・イーラム解放の虎(LTTE)支配地域への攻勢を強め、国内避難民への被害が拡大している状況を受け、ムカジー外相は、「タミル系民間人が殺害されている状況を非常に不愉快に思っている」との声明を発表。24日には、ナラヤナン国家安全保障顧問がインド首相特使としてスリランカに派遣された。

IV. 日印関係

4月2日

- マルチ・スズキ社は、2008年度の販売台数(国内販売台数と輸出台数の合計)が約79万台(対前年度比3.6%増)となり、過去最高を記録したと発表。また、同社は、2009年3月期の国内販売数が前年同期比で14.6%を記録したと発表。

4月16日

- 株式会社タニタは、家庭用・業務用計測計量機器(体脂肪計などの健康計測機器)の販売を行う現地法人をムンバイ市に設立したと発表。

4月17日

- 古河電気工業株式会社は、インドの Universal Cables Limited 社との合弁で、光ファイバの線引き製造会社を設立することに合意したと発表。古河電工では、インドにおける通信事業の活発化に伴い、光ファイバ需要も大きく成長することが期待されるとしている。

4月30日

- 藪中外務次官がインドを訪問し、メノン・インド外務次官との間で外務次官対話を実施。昨年10月のマンモハン・シン首相の訪日の成果に基づき、安全保障や経済関係などの2国間関係のほか、国際社会の様々な課題について意見交換が行われた。

今月の注目点 「インド総選挙の見通し」

今回の総選挙も、前回同様、全国政党である कांग्रेस党とインド人民党(BJP)の対立を軸に展開されている。一方、地方政党などの勢いも侮りがたく、全体としてかつてないほどの混戦模様を呈している。

インド国内では、現在のところ、 कांग्रेस党中心の連立政権が成立する可能性が高いと見る論調が多い。他方、BJP 主導の連立政権が成立する可能性も否定できず、また、いわゆる「第三勢力」中心の連立政権となる可能性も排除されない。開票(5月16日)後、各政党の得票数を踏まえて激しい連立工作が行われると見込まれる。

なお、 कांग्रेस党中心の連立政権となる場合にはシン首相が続投する見込み。この場合、外交方針を含め、インド政府の政策に大きな変更はないと見られる。ただし、インド共産党などの左派政党が キャスティング・ボード を握る場合(例えば、 कांग्रेस党が左派政党との連立を求め、左派政党が連立政権の中で大きな発言力を有するような場合)には、経済自由化路線など、これまでのインド政府の政策方針に変更が生じる可能性もある。

4. イベント紹介

〈ガンジー像除幕式のお知らせ〉

インド・ニューデリーにあるガンジー修養所再建財団から杉並区日印交流協会に寄贈されたガンジー像の除幕式が行われます。

昨年の『月刊インド』6月号でも紹介しましたように、インド独立の志士であるチャンドラ・ボースの遺骨の供養を続ける蓮光寺との縁もあり、杉並区とインドは深い関係にあります。

ガンジー像が設置される「読書の森公園」は、芝生がきれいで近隣の方々の憩いの場として親しまれており、多くの方が訪れる場所で、平和の象徴であるガンジー像にふさわしい場所です。お近くの方は、足を運ばれてはいかがでしょうか。

日 時：5月24日 日曜日 1:00PM～

会 場：杉並区 読書の森

(JR中央線、東京メトロ丸ノ内線「荻窪」駅南側出口から徒歩約10分)

東京都杉並区荻窪3丁目39番16号

(雨天の場合は近くの杉並区立中央図書館講堂)



〈ガンジー像〉
杉並区交流協会提供

〈猪俣弘司 外務省南部アジア部長 講演会〉

会員の皆様方には既にご案内しておりますが、猪俣外務省南部アジア部長の講演会を開催致します。まだ、席に若干の余裕がございます。ご案内のとおり、5月22日(金曜日)まで受付けておりますので、関係各署の方々をお誘い合わせのうえ、ご参加下さい。

日 時：5月29日 金曜日 5:00PM 開演

※開場 4:30PM

会 場：東京商工会議所ビル7階 国際会議場

講 演：「緊張する南アジア情勢と日本」(仮題)

参加費：会 員－ 無 料 (法人会員は3名様迄無料)

非会員－1,000円

〈「南アジア・フォーラム」開催のお知らせ〉

日 時：6月4日(木曜日) 7:00PM～

会 場：アルカディア市ヶ谷 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25

講 演：「インド新政権への期待」

講 師：アフターブ・セット氏(慶応義塾大学教授 元駐日インド大使)

問合先：岐阜女子大学南アジア研究センター

〒501-2592 岐阜県岐阜市太郎丸80

TEL 058-229-2211

FAX 058-229-2222

開催責任者－福永正明氏

担当－研究員 日下部尚徳氏

<会員懇親会のお知らせ>

会員懇親会を下記要領にて開催致します。会員相互の親睦を深めて頂き、また協会事務局に対するご意見・ご要望等直接お伺いできればと思っております。

詳細を記した参加申込み用紙を同封致しておりますので、ご確認のうえお申込み下さい。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

日 時：7月8日 水曜日 6:00PM～

場 所：インド料理「マハラジャ 丸の内店」 TEL 03-5221-8271

〒100-0005 東京都千代田区丸の内 2-1-1 明治安田生命ビル B2-205

東京メトロ千代田線「二重橋前」駅③番出口から1分

参加費：お1人様 3,500円

(6月30日火曜日迄に、お申込みと共に指定口座にお振込み下さい)

<国際居住年(IYSH)記念基金ハウジング・セミナーのお知らせ>

第22回 海外からの留学生、研修生のための国際居住年記念基金ハウジング・セミナー
THE 22nd HOUSING SEMINAR FOR FOREIGN STUDENTS AND TRAINEES IN JAPAN IN COMMEMORATION OF THE IYSH
の参加者を募集しています。お問い合わせ・ご確認等は、下記の財団法人日本建築センター、または同センターのホームページでお願い致します。

Those who can communicate in Japanese language are welcome to join in this Seminar.

主 催：社団法人 日本住宅協会

事 務 局：財団法人 日本建築センター 国際部 長嶋、寺川

(問合先) TEL 03-5816-7525 FAX 03-5816-7541 E-mail kokusai@bcj.or.jp

http://www.bcj.or.jp/c20_international/training/training02.html

5. 新刊書紹介

§ 『アジア研究所紀要 第三十五号』



編集・発行：亜細亜大学アジア研究所

非売品

- * ASEAN 経済共同体ブループリントの概要と評価…………… 石川幸一
- * タイの FTA 戦略とその活用状況 (AFTA を中心に)…………… 助川成也
(「タイ・インド FTA」の記述含む)
- * 改革開放政策 30 年における中国企業会計制度及び会計教育の貢献 …… 大島正克
- * 韓国会計基準の国際標準化過程とその課題…………… 夏目重美
- * 中国の二重構造社会に関する一考察…………… 小林熙直
- * Prospects for Korea-Japan Free Trade Agreement…………… 金 民寧
- * 老舗(長寿)企業の研究(序論)…………… 横澤利昌

§ 『わらえる仏教 18 話』



著者：中村 行明（なかむら ぎょうみょう）
発行：出帆新社（ISBN 978-4-86103-061-1）
定価：1,400 円＋税

日本人の仏教徒として 26 年間インドで修業している中村上人が書かれた、仏様の教えに通じる 18 のお話を収めた本です。どんな風に「わらえる」のかは、読んでからの楽しみです。ミニー吉野氏による素敵な、そして「わらえる」イラストにもご注目下さい。

§ 『最後の詩』



著者：ラビンドラナート・タゴール
訳者：臼田 雅之（うすだ まさゆき）
発行：株式会社北星堂書店（ISBN 978-4-590-01247-6）
定価：1,900 円＋税
日印協会会員特別価格：1,800 円（税・送料込み）

1920 年代後半に書かれ、今回初めて邦訳されました。執筆時と同年代のインド北東部を舞台に、エリート男女の出会いから結末までが、描かれています。タゴールならではの情緒的な詩で語られる男女の機微、邦訳されてなお美しい文体です。

本書は協会会員向けの特別価格での購入が可能です。詳細は、同封のチラシをご覧ください。

§ 『東方』 第 24 号



編集・発行：財団法人東方研究会
非売品

東京大学名誉教授・日本学士院会員であった故中村元先生によって創立され、「東洋思想の研究およびその成果の普及」を目的とする財団法人東方研究会の定期刊行物です。

- ◇中村元先生東方学院講義録(3 本)
- ◇第 18 回鎌倉夏期宗教講座(講演録)
- ◇論考(6 本)・報告(2 本)
- ◇ラフカディオ・ハーン著『涅槃』翻訳

以上が掲載されています。特に中村先生の講義録は希少です。

§ 『多民族社会における宗教と文化 No.12』



編集：富永 智津子(共同研究代表)
発行：宮城学院女子大学キリスト教文化研究所
非売品

2008 年宮城学院女子大学キリスト教文化研究所で行われたシンポジウム「多民族社会の女性たち—その生き方を読み解く—」の、研究報告書です。

「マーイーの物語—北インド農村からの報告」(八木裕子氏)が収められています。

6. 掲示板

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回の発送は、6月12日(金)を予定しております。

インドに関係のある催事のチラシなどを会報に封入しませんか？ 作業する方は、会員でなくても構いません。話しながらの和やかな雰囲気での作業です。同封のチラシをお読みの上、事務局までご連絡下さい。

〈皆様のご意見歓迎致します！〉

『月刊インド』、『現代インド・フォーラム』やホームページなど、内容を充実していくために、会員の皆様のご意見・ご感想を是非お寄せ下さい。

ホームページには、皆様の提言を投稿して頂けるコラムがございます。日印関係を更に良くするためのお知恵をお貸し下さい。“談論風発”を期待しております。

〈編集後記〉

表紙の写真は、インド政府による Tokyo Construction Project の1つである、千鳥ヶ淵に完成したインド大使館の外観です。2004年に在日インド大使館の建替に伴う設計者選定から始まり、日本でのプレゼンテーション、インド本国での審査が行われ、株式会社プランツアソシエイツが設計・工事監理を担当し、清水建設株式会社により施工されました。プランツアソシエイツは多くの受賞歴をもち、建築好きならずとも、外観だけでも一見の価値があります。移転が終了次第、イベント等も行われると思いますので、その際はお知らせ致します。

なお、ビザ発給等の領事事務は今まで通りのインドビザ申請センターで行います。

<http://www.indianvisaattjapan.co.jp/index.jsp> をご参照下さい。



日印親善のために会員の輪を広げましょう



法人会員・個人会員の入会をお待ちしております。

1903年、大隈重信、澁澤榮一らによって創設された財団法人日印協会は、これまで日印の相互理解と両国の親善増進のために、日々地道な努力を続けてまいりました。ここ数年来の日印の良好な関係がより一層深まるためにも、会員の獲得は重要な課題であると考えています。インドに興味のあるお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。

ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。

日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費：個人 6,000円/口
学生 3,000円/口
一般法人会員 100,000円/口
維持法人会員 150,000円/口

☆入会金：個人 2,000円
学生 1,000円
法人 5,000円
(一般法人、維持法人会員共に)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

月刊インド Vol.106 No.4 (2009年5月15日発行) 発行者 平林博 編集者 青山 鑛一
発行所 財団法人日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: <http://www.japan-india.com/>

